K-441

山形県教育庁文化課

昭和50年3月

余目町梵天塚遺跡発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター
6-0000-462-01
6-0000-462-01

酒井忠一
佐藤禎宏
小野忍

462
6

山形県余目町教育委員会

はじめに

余目町教育委員会教育長　佐藤菊麿

払田山（梵天塚古墳）は，私ども子ども時代（明治末期から大正の初期にかけて）を近くで過ごしたものにとっては，忘れることの出来ない思い出の丘であります。

それは，私の家（館）から農道沿いに1キロ程の所にあり，平坦地の中に只一つ盛り上がった丘で，菜の花畑から，はるかに広がる麻畑や麦畑等四季折々の景観が，この丘に登れば一望に見わたされたからです。

それに，ここから南300メートル程の所には払田松（現在県指定天然記念物）があり，周囲は一面の草原であり，戦争ごっこには恰好の場所でありました。日曜日や夏休みには，一部落だけでなく，数部落が連合しての大がかりな戦争ごっこが行なわれることもあって，周辺部落の当時の腕白どもにとっての思い出の丘でもありました。それに，余目小学校の春の遠足には，ほど良い距離にあるところから，この丘の上で小休憩して，近くの長畑部落の阿部善兵エ氏の庭園で昼食を取るのが年中行事の一つとなっていたものでした。

その後，周囲の模様も麻畑から麦畑やそば畑に，そして疏菜畑へと変り，丘もその上に大きなエノミの木1本しかなかったものが，いつの頃にか松の木が植えられ，近年では丘の上に花見の客の姿も見られる程立派な樹となっております。

丘の南側の農道も町道として子どもの頃の曲りくねった道から直線の路に改修され，更に50年度には12メートルの巾員をもつ都市計画道路として拡巾舗装工事が計画されることになりました。

そこでこの丘は，昭和37年の山形県埋蔵文化財包蔵地調査に梵天塚遺跡として遺跡番号1256号で登録されていることでもありますし，本町としても昭和47年に文化財保護条例を制定し，文化財の保護に努めているところであります。今般の道路整備事業により貴重な遺跡が棄損されることのないように，またこの遺跡の文化的価値の学術的究明の必要を考え，昨年以来酒井忠一氏を団長として，庄内考古学会の方々にその調査をお願いしたところであります。

このたび2度の調査の報告を戴きましたので，広く町民各位のご理解を戴き，今後の保存に意義あらしめたいとの考えからこの小誌としたところであります。

最後に，2回に亘り厳寒の中，風雨の中，竹ヘラをたよりに調査の労をとられました調査員各位と，梵天塚古墳と命名下さった柏倉名誉教授。それから数百年に亘る永い年月，遺跡の保存に尽して下さった払田・南口両部落の皆様，その他関係各位に厚く感謝申し上げる次第であります。

余目町梵天塚遺跡

右：遠景（北西より）

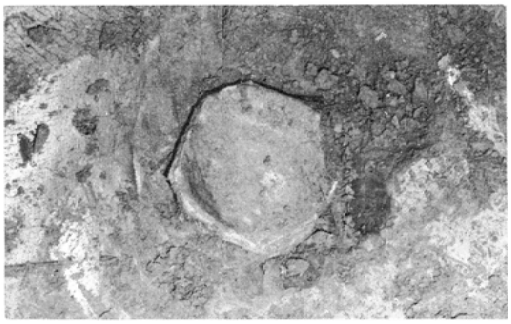
下：近景（北より）

左中：２トレ層序

左下：６トレ階段状掘り込み

右上：４トレ出土の須恵器

右下：４トレ出の須恵系土器



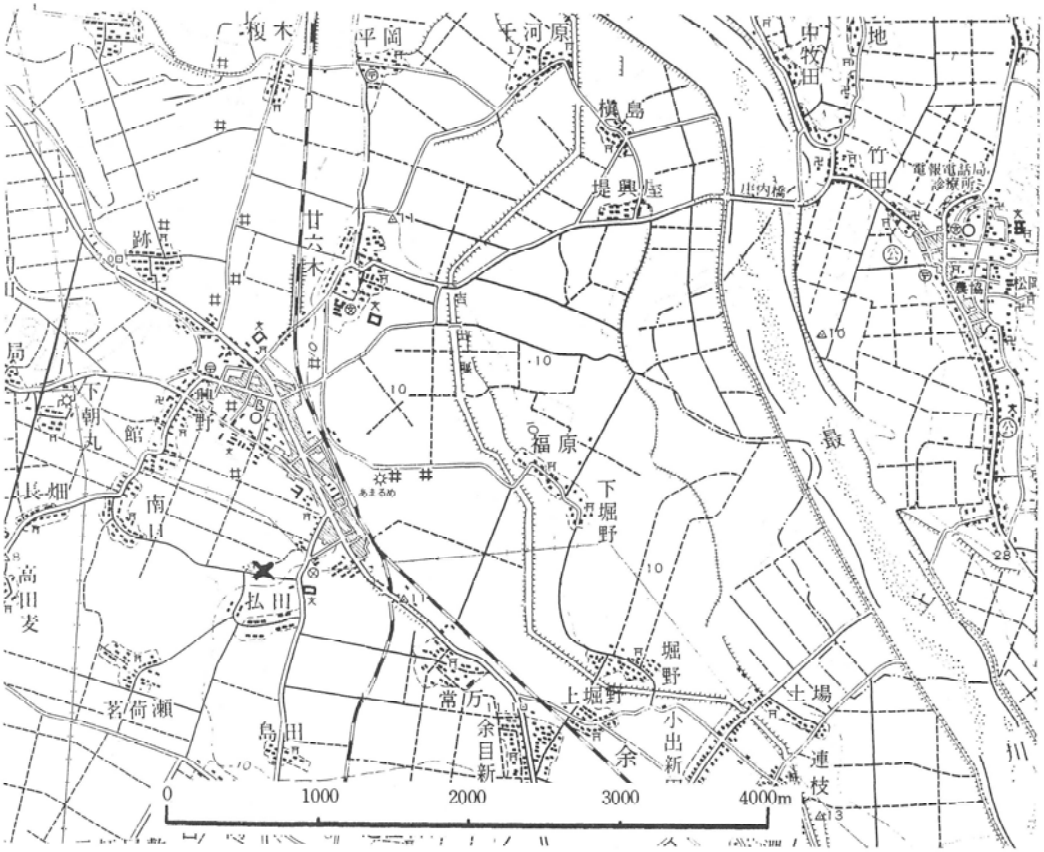
余目町梵天塚遺跡発掘調査報告

酒井忠一・佐藤貞宏・小野　忍

I

梵天塚遺跡は山形県東田川郡余目町大字余目字上梵天塚29、29－3、30－1、30－2、32－1、32－2、60、61に所在する。地目は畑地・道路・雑種地などであり、現存する墳丘は30－1、60、61の地番部分である。墳丘の南側29－3、30－2、32－2はすでに町道として墳丘の一部を削って拡幅されている。

梵天塚遺跡の山形県遺跡番号は1256で、平安時代の墳墓として登録されているが、正式な調査を



第1図　梵天塚遺跡付近の地形（X印が遺跡）

実施したことはない。

余目町は庄内平野の中央部にあり、県下でも山地のない珍しい町である。北上する羽越線が最上峡を縫って西下した陸羽西線と余目駅で合している。遺跡は余目駅よりわずかに0.8Km程南西方にある。現在平坦に見える遺跡周辺の地勢も、耕地整理以前は東から西へ緩慢な傾斜をもち、特に遺跡所在地附近は目立って舌状に張り出すような微高地であったらしい。今でも周囲の水田より1mの比高の地に立地している。また水田は少しづつ姿を消し、宅地化現象が急激に進行している。

墳丘は長軸を東西にとりその長さは32m、南北の最長幅は15.2m、最大高は2.8mで口を西にもった瓢箪形を呈している。標高が9.5mの地にこのような小丘が存在することは近辺でも稀でよく目立ち、古くから親しまれてきた形跡がある。梵天塚の由来は明らかでないが、地名と同一で、この西方も下梵天塚と呼ばれている。また俗に上人塚とか正直山と呼称され、近年塚の山公園という標式を立てて子供の遊び場として開放されてきた。

ところが余目町の都市計画で余目駅梵天塚線として道路整備事業によって、さらに墳丘の南側が欠損されることが判明した。この事情が直ちに町土木課より町教育委員会へ、そして県文化課へ報告され、県文化財巡回調査員として佐藤が現地を踏査したのは昭和49年1月22日雪の中であった。以後一部破壊の是非よりも性格究明のための予備調査の必要性を説き、町当局の善処によってそれが実施されたのは同年5月3日〜6日である。この74㎡の発掘調査のとき 50分の1の地形図が作成され、墳丘が版築技法を用いた盛土であること、墳丘裾部に溝状遺構が存在すること、1部葺石状の河原石群が存在することなどが確認され、古墳の可能性をもつに至った。また墳丘下部が道路下にも及ぶことが確かめられた。その後余目町は墳丘の現状を保存するように努力され、墳丘南側の道路部分を発掘調査したのは同年12月6日〜15日風雪の中である。この79㎡の調査によって4カ所にわたる掘り込み遺構などの新たな事実が検出され、遺跡の性格に波紋を投じることとなった。以下は2度にわたる調査の報告である。

なお発掘調査は調査団を組織して実施し、団長を酒井忠一として佐々木七郎・佐藤禎宏・小野忍・小野一彦が調査にあたった。5月には柏倉亮吉・川崎利夫両先生の指導を受け、12月は東海林次男氏の協力を受けている。また町教育委員会の佐藤喜代治指導課長・日野淳社会教育主事からは誠心誠意なご好意を授かった。特に梵天塚保存のため、調査実施のためのご努力は高く評価するとともに、深く感謝したい。2度の調査には次の方々が参加し、調査に協力していただいた。銘記して感謝したい。(佐藤　禎宏)

斎藤芳吉・酒井英一・加藤惣太郎・富樫せき・伊与田陽子・斎藤和子・佐藤正雄・斎藤正子・梅木俊明・池田徳右衛門・石井末勝・池田春治・池田百合子・佐々木弘・樋渡豊助・佐々木重雄・阿部兵一・池田繁子・樋渡真須子・斎藤たみ・小野幸子・寺田司子・金子美穂子・五十嵐則子・伊藤安子・富樫純子・高野一候・海野さだえ・吉川玲子・渡辺秀・佐藤さち子・村上恭子・石川文子・土田律子

II

遺　構

梵天塚遺跡の周辺は、急激な宅地化現象で旧来の面影を失ないつつある。しかし、本来の梵天塚遺跡は、周辺の旧田面から約1mほどの比高をもつ舌状の微高地に立地している。発掘調査にさきだって、昭和49年4月に実施した1／50の地形実測調査の結果、当小丘の現形は次のように観察された。現高2.8m(標高11.72m)、長軸は東西にとり32m、最大幅は東半分にあり15.2mをはかる。地元の古老の話によれば、小丘はもっと南へ張り出していたというが、南側は町道によって削り取られ、あたかも瓢箪を二分したかのようにみえる。頂上部は平坦ながら西方へ緩かに傾斜している。また、頂上平坦部の北東隅および北西隅において、20cm前後の河原石群が認められた。しかし、小丘を横断する第2トレンチ等では検出できなかった。小丘の縁辺部は、急変換して崖状となり、丘裾部へと続く。東部は緩やかな斜面をなし、一部小テラス状になっているが、これは一時畑地として切り取られたためである。このことは、発掘による断面観察でも明らかにされた。なお、裾部周辺は、現在も畑地となっている。

次に、昭和49年5月(予備調査)と同12月(第1次調査)に実施した発掘調査の結果について述べたい。

今回の調査は、土木工事に伴なう緊急調査のため、その目的として

① 梵天塚遺跡の小丘の現形をとらえる。

② 当小丘が人工物であるか否かをとらえ、その成形および構築状況を確認する。

③ また、これと並行して、小丘の周囲にいかなる施設があるか確認する。

④ これらのことから、梵天塚遺跡の年代および性格の一端をとらえ、今後の状況へ対応する資料を得る。

の四点にしぼった。

以上の目的を果すために、小丘上および小丘周囲に、幅2m、長さ4〜15mのトレンチを7本入れ調査を実施した。発掘面積は約159㎡。発掘の結果、現小丘は、後世の人びとによってかなり原形を崩されていることが知られた。例えば、東側のテラス状の小平坦部は小丘を切り取り畑地とし、南側は道路として削られ、南西隅では逆に後世の排土・塵芥類が厚さ80cmほどにわたって積まれていた。さらに、丘の一部は墓地にもされたことがあるという。

各トレンチでの層序は、複雑な様相を示している。しかし、基本的な層序として次の四層に大きく区分される。第Ⅰ層は表土で耕土ないし攪乱盛土層、第Ⅱ層は第Ⅲ層の崩壊土、第Ⅲ層は小丘の主体をなすもので、木炭片等を含む多種類の粘土が5〜23cmの厚さで交互に版築された盛土層、第Ⅳ層は地山である。第Ⅲ層は、土質・色調・含有物等で細かに分けられた暗褐色粘土・黄褐色粘土・茶褐色粘土・灰白色粘土・黒褐色粘土あるいは木炭片やこれらの混合した粘土等が互層している。特に、第2・3・4トレンチでは、現地表下50〜100cmから最高二十五枚余にわたる厚さ約2.8mの版築状況が観察された。小丘の裾部に設定した他のトレンチでも厚さの差こそあれ、ほぼ同様な状況を示した。また、第4トレンチの版築の下部積層から、須恵器小片(甕?)が出土して

いる。これらのことから、当小丘は人為的な構築物であることが確認できた。

小丘の裾部付近においては、溝状遺構あるいは掘込遺構が検出された。溝状遺構は東裾（第1トレンチ）及び北裾（第3トレンチ）で検出。幅30〜100cm、深さ20〜40cmを計る。東裾側は南北方向であるのに対して、北裾側は東西から南へ鍵形に曲る。調査区域と日程の関係から更に追求できなかった。小丘を形成する版築積層の粘土は、溝状遺構をおおい、その外側で止まる。また、掘込遺構は、小丘南側の町道敷内で第4〜7トレンチにかかって東西に並んで4例認められた。一段掘りの類と二段掘りの類の二形態に区分できる。東側2例は二段に掘り込まれた形態で、第1段目の深さ15cm前後、第2段目の深さ15cm前後、長さ6.9〜6.6mをはかる。西側2例は一段掘りの形態をとり、深さ15〜30cm、長さ4.6〜5m。いずれも、南側のみの検出で完掘されておらず、南北幅は不明である。南北長が最も長い第5トレンチの西側例では1.9mあり、その他も1.1m前後であることから、版築積層の中にさらに入り込むものと推定される。版築は、掘込遺構の基底部からはじめられている。また、版築積層の西および南限界は、掘込遺構の外2m前後にある。なお、溝状遺構は幅の判明したものをさし、その不明なものを掘込遺構とここでは便宜上称した。しかし、いずれも当小丘を形成することに関わる施設と推定し、基底部から版築積層の粘土が入っていることから、他と区画したり、墓坑とすることについては保留しておきたい。また、この施設が現小丘形成にかかわるものとすると、本来の形状は長軸を対象線とした瓢箪形とはならない。西および北西部が未調査であり、版築積層の下部が不明確であるため、原形については今後の課題である。なお、現状におけるこれらの遺構から推定される小丘の規模は、東西28.2m、南北19.6mである。

その他の遺構として、小丘から幾分離れた第5トレンチの一部に溝状遺構を検出した。現長1.2m、深さ20cm。埋土は、暗茶褐色粘質土で、上部に須恵系土器片を若干含む。また、この直ぐ北側で、小丘崩壊土の下層から須恵器や須恵系土器が集中して出土している。完形品はなく、いずれも破片である。

小丘の性格・年代については次章で触れることにして、次に出土遺物について述べる。

遺　物

梵天塚遺跡から出土した遺物は、須恵器および須恵系土器などの土器である。出土数は少なく、総数83片ほどである。そのうち、第5トレンチ内が64片で大半を占め、次いで第7トレンチの14片である。器形では、甕形土器が大半の58片で、坏形土器がそれに次ぐ。また、器種では須恵系土器が大半を占めている。

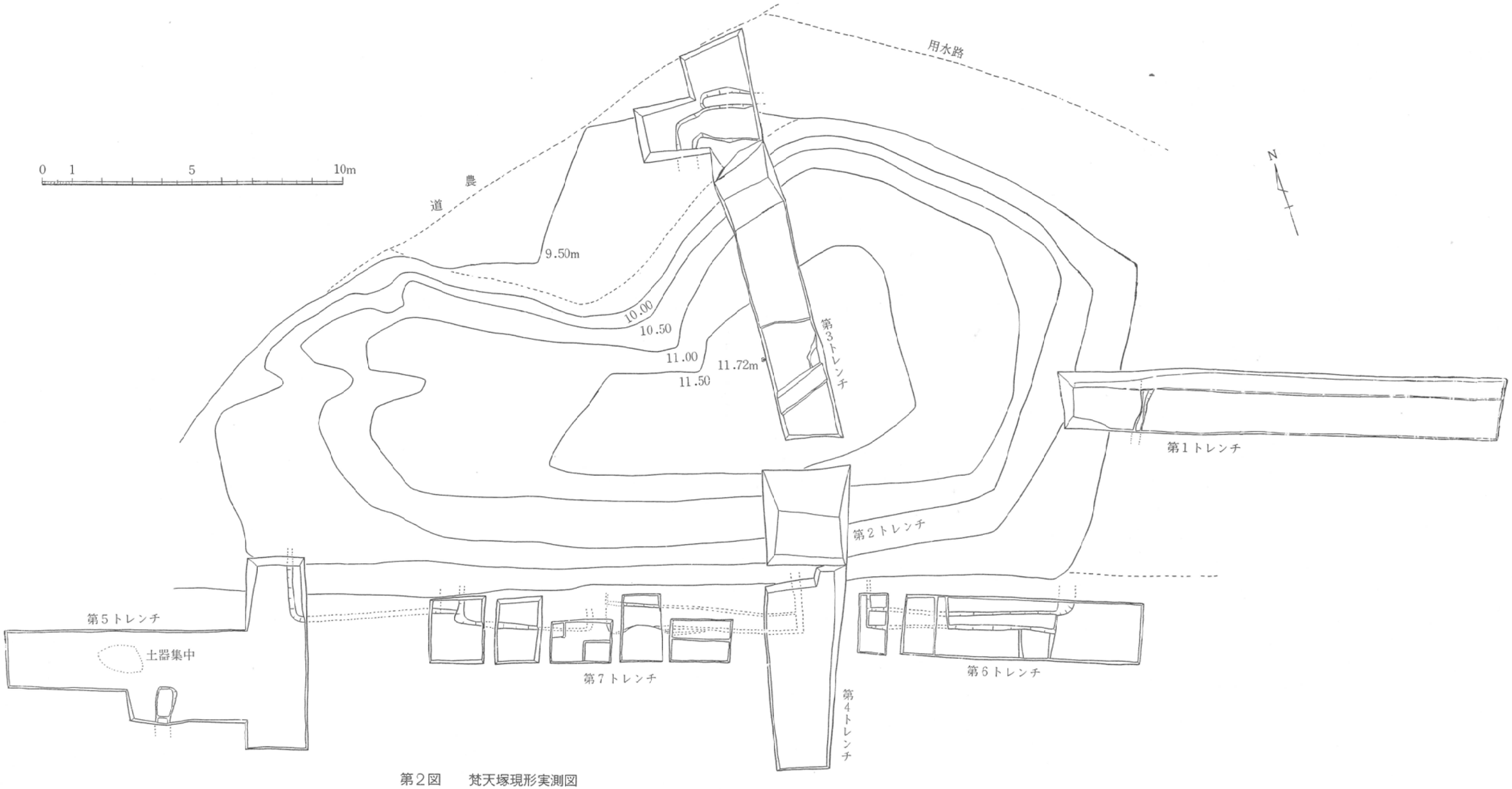
梵天塚遺跡出土の土器はほとんどが小破片で、そのうち図化し得たのは13例ある。器形によって坏形土器、甕形ないし鉢形土器、壺形土器に分類される。以下、順次各器形毎に概観していきたい。

坏形土器

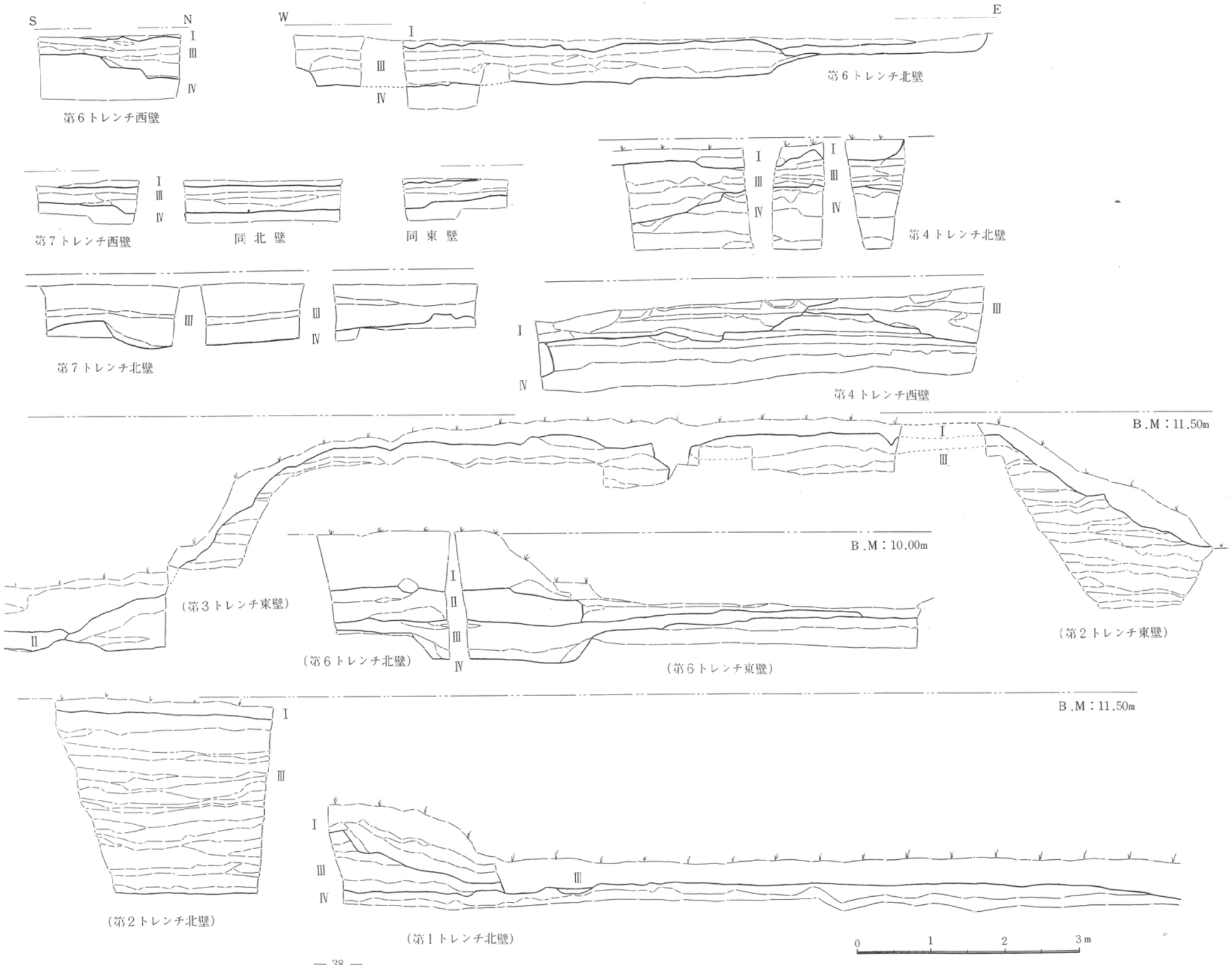
2番目に多く出土している。完形品はなくいずれも破片である。器種および形態差から5つに細分できる。

Ⅰ）坏形土器第1類

須恵器坏の底部小片である。1点のみ。第3トレンチ小丘頂の第Ⅰ層内出土。底部下面に回転ヘ



第2図　梵天塚現形実測図



第3図　断面実測図

(第1表)

第2・4トレンチ
北壁東半分のセクション

Ⅰ層：表土

Ⅲ層：版築積層（以下、上部から下部へ）

- ○暗褐色粘質土
- ○灰白色粘土。ヒビがすぐにはいる。
- ○暗褐色粘質土（木炭片・灰白色粘土塊含む）
- ○暗灰白色粘土（木炭小片含む）
- ○黄褐色粘土（木炭片・黒色土塊含む）
- ○灰白色粘土（褐色土塊・酸化鉄分含む）
- ○黒褐色土（灰白色粘土塊・酸化鉄分含む）
- ○暗灰白粘土（木炭片・黒色土塊酸化鉄分含む）
- ○黒褐色土（木炭片・灰白色粘土塊含む）
- ○暗褐色土（木炭片を含む・黒色土塊含む）
- ○暗褐色粘質土（酸化鉄分含む・黒色土塊含む）
- ○黄色粘土（黒色土塊含む）ヒビがすぐにはいる。
- ○灰白色粘土（木炭片・酸化鉄分含む）
- ○暗褐色粘土（木炭片・灰白色粘土塊含む）
- ○暗褐色粘質土（木炭片・黒色土塊・黄色粘土塊の小片含む）ヒビがすぐひはいる。
- ○暗黄色粘質土（黒色土塊含む）
- ○暗黄色粘質土（木炭小片含む）
- ○黒褐色土（木炭小片含む。黄色粘土小塊含む）
- ○暗黄色粘土（木炭小片含む。白色粘土小塊含む）
- ○褐色粘質土
- ○淡褐色粘質土（木炭片含む）
- ○暗黄褐色土（黄色粘土塊含む）
- ○暗褐色土
- ○暗黄褐色粘質土

Ⅳ層：地山

- ○黄褐色粘質土
- ○黄色粘土
- ○黄白色粘土（フ多し）
- ○黄灰白粘土

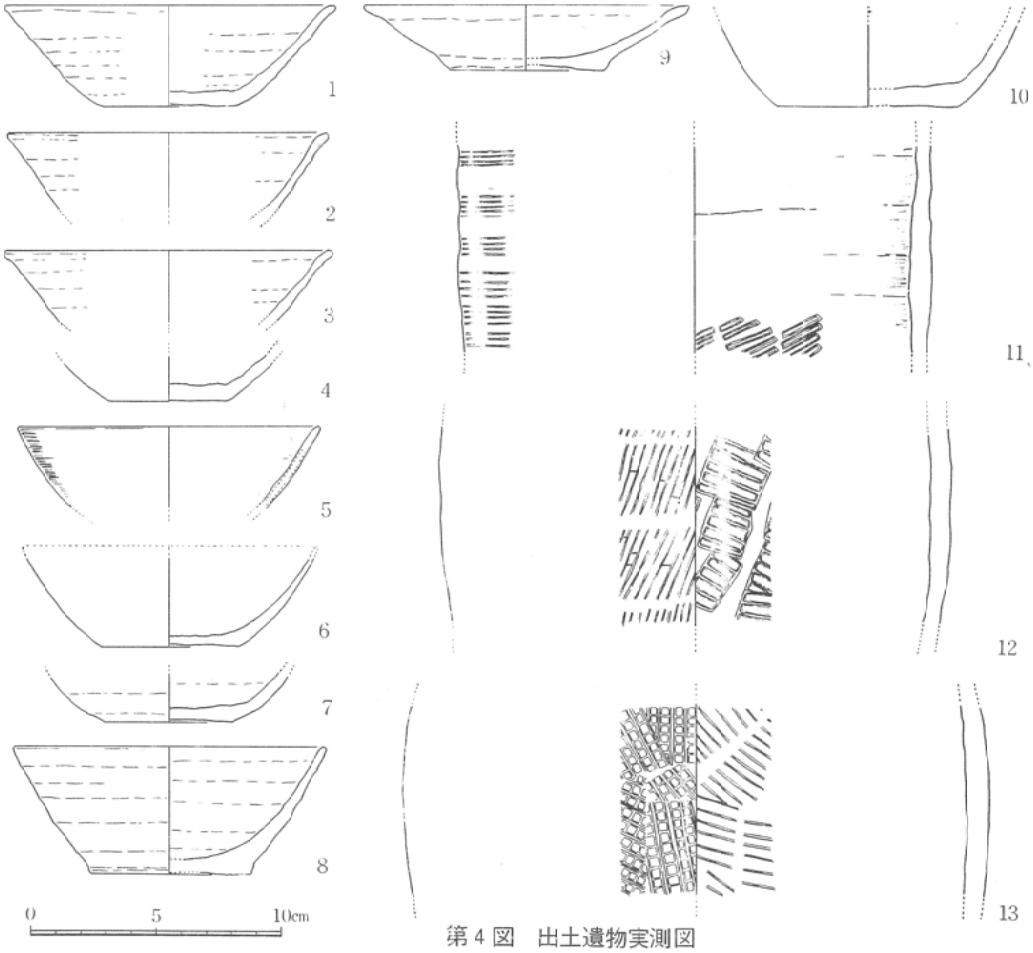
ラキリ痕を認める。体部と底部との界は丸味をおびる。砂粒を含むが、胎土は緻密で硬い。焼成も良好。

ⅱ）　坏形土器第2類（第4図1～4）

図示した4例が本類の須恵坏である。いずれも第5トレンチ内出土。口径12.6～13.2cm、器高4cm。底部は平底で、下面に時計逆方向に収束する回転糸切り痕を認める。緩かに立ちあがる体部は、口縁部でわずかに外反する。口唇端部は丸くおさまる。砂粒を含むが、胎土焼成は良好で硬く緻密である。淡灰青色ないし青灰色を呈する。

ⅲ）　坏形土器第3類（第4図5～7）

須恵系土器坏で17例出土。いずれも第5トレンチ内出土。口径11.8cm前後、器高4cm前後。淡黄橙色ないし暗灰褐色を呈し、胎土は不良で軟かい。(5)例は、胎土が良好で淡白黄色を呈する。内外面にヨコナデが著しい。口唇端は丸くおさまる。底部は平底で、回転糸切り痕を認める。体部と底部の界は丸味をおびるが、(7)のように切りはなしのままのものもある。



第4図　出土遺物実測図

iv）　坏形土器第4類（第4図8）

1例のみ、第5トレンチ内出土。口径12.2cm、器高5.1cm。底部は平底で、時計逆方向に収束する回転糸切り痕を認める。体部は幾分内彎し、口唇部は丸くおさまる。底部の縁辺は整形されていない。胎土は砂粒を含み良くないが、焼成が良好で硬い。明褐色を呈する。

v）　坏形土器第5類（第4図9）

1例のみで第5トレンチ出土。口径12.8cm、器高2.6cm。砂粒を多く含み、胎土・焼成は不良。軟質。器面は著しく荒れている。淡白灰色を呈する。底部は、上底状になっている。小形皿の形態であるが坏として分類した。

壺形土器

須恵器広口壺の口縁部片と考えられる。第5トレンチ出土。口縁端部は、外側につまみだしがあり、短かな廂状になっている。暗青灰色を呈する。内外面に自然釉が付着している。

甕形土器（第4図10～13）

甕形土器は、最も多く出土し58片を数える。全形の知れるものはない。須恵器を若干ながら認める。須恵器以外は全体的に、胎土・焼成は良くない。器面が荒れ整形痕の不明なものが多い。赤褐色ないし淡黄橙色を呈し、脆い。底部は平底。体部は長胴の形態をとり、径19～23cm・厚さ5～8cmをはかる。口縁部は体部から大きく「く」の字状に外反して開き、また端部で短く立ちあがる。体部の外面には、横位の条痕ないし縦位の平行状、あるいは梯子状叩目痕を認め、内面には横位ないし斜位の平行状当板痕を認める。輪積み痕を残している例もある。

甑(?)形土器

第4トレンチの小丘を形成する版築積層から検出した。青灰色を呈し、胎土は緻密で硬い。甑体部片と推定されるが定かにし難い。

以上、梵天塚遺跡から出土した土器についての所見を簡単に述べた。これらの土器は、先述したように各トレンチの攪乱層あるいは第5トレンチの西側から主に検出している。特に第5トレンチでは、小丘崩壊土下からほぼ一括して出土している。

出土した土器の特徴をまとめれば次のとおりである。坏形土器第1類は篦切り痕を認め、底部の縁辺は丸味をおびている。いわゆるAタイプあるいは6－a類に相当する。（注1）。

坏第2類は回転糸切り痕を認め底部の縁辺は丸味をおびている。坏3～5類は、須恵系土器で回転糸切り痕を認める。いわゆる10a・10bに相当する（注1）。甕形土器は長胴形で口縁部が体部よりも大きく外反する。土師器の第7型式に相当する。（注2）

以上のことから、坏第1類は9世紀後半に、その他は10世紀から11世紀に位置付けられよう。

（小野　忍）

（注1）　岡田茂弘・佐々木茂植・桑原滋郎「長根窯跡群Ⅱ」（1972）
岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ（1974）

（注2）　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯（1957）

Ⅲ

今回の発掘調査によって、梵天塚遺跡の小丘が二十五枚余にわたって版築された構築物であることが確認されたことは、大きな成果である。また、小丘の現形は瓢箪を二分した形状を呈している。しかし、現小丘南側の道路敷を調査した結果では、北側の形状と対象形にはならない。すなわち、1／50の現形測量調査時に想定したような「前方後円墳」形にはならない。その上、後世の削崩によって、原形がかなり損なわれている。また、小丘裾部付近で検出できた溝状あるいは掘込遺構が現丘形成に関わるものであれば、南・東および北側東半分は直線になり、(長)方形の一部をなすことになる。規模は、東西28.2m、南北19.6m、高さ2.8mと推定され、現形よりも長軸が短かく短軸が長くなる。しかし明確な原形を復原するには、現時点では困難で、今後の調査課題として残った。さらに溝状遺構あるいは掘込遺構についても、小丘形成に関わる施設と想定しているが、その規模の把握と合わせ今後の課題である。梵天塚遺跡の性格についてであるが、今調査によっては性格を決定することはできなかった。しかし、版築によっていることから、墳墓・基壇・土塔などが考えられる。そのうち後二者については、それに伴う他の施設が皆無な点から論外である。前者についても、なんらの根拠もないが、中世墳墓などに、時折版築したものが見られることから、墳墓の可能性がある。なお1963年版、山形県遺跡地名表（注1）では平安時代の墳墓としている。年代については、遺跡の崩壊土をかぶっている土器が10～11世紀であるので、これを下限とした年代が考えられる。上限については、版築内から出土した甑様須恵器小片の年代であるが、編年上の位置を定め得ず不明といわなければならない。ここでは、遺跡の年代を中世まで下らないものとしておさえておきたい。今後全面的に調査する必要がある。

（酒井忠一・佐藤禎宏・小野　忍）

（注1）　山形県教育委員会「山形県遺跡地名表 — 埋蔵文化財包蔵地一覧 —」（1963）